



子連れフィールド・ワーカー奮闘記 メキシコ篇 あかね色の空の下で

武田 和代 (たけだ かずよ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

調査地へたどり着くも…

二〇〇八年四月から一年間の予定で、二歳になる娘を連れて、メキシコ南部のオアハカ州でコーヒー豆生産者の生計とフェア・トレードに関する調査をおこなっている。

オアハカ州は、メキシコのなかでも先住民とよばれる人びとの割合が全人口の約四割と高く、民族構成も多様だ。州都・オアハカ市の市場では、カラフルな民族衣装をまとった女性たちが、特産のチーズやチョコレート、バッタの丸焼き、民芸品などを売り、広場では舞踊や音楽などの祭りが盛んに開かれている。しかし一方で、中央政府による近代化や開発の波から取り残され、貧困層の割合が高いという厳しい現実もある。

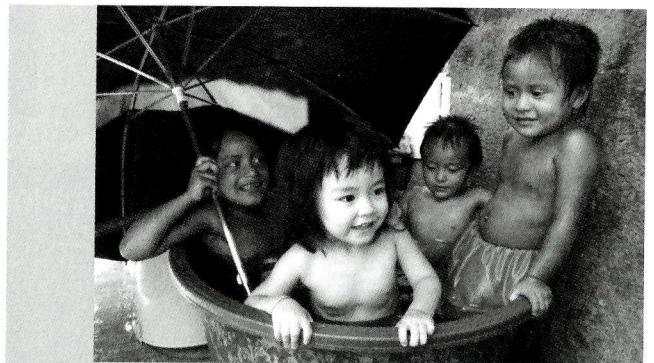
メキシコで子連れ調査をするにあたっては、いろいろな不安や心配がつきまとうが、小さな子どもは案外、新しい環境にすぐに適応してくれる。保育所を利用しているが、娘は一カ月も経たないうちにスペイン語が口から出てくるようになり、今では人形相手にスペイン語で話しかけるようになった。

便利な街に住んでいるあいだはいいが、難関は村へ調査に行くときだ。特にわたしの研究対象であるコーヒー生産者の住む地域は、州都から自動車で約八時間ほど離れた標高約一〇〇〇メートルの山間

部にある。そこへたどり着くまでには、山肌を縫うように走るカーブの道が続くため、車酔いした娘はバスのなかで吐いて泣き叫ぶばかり。目的地に着いたときにはわたしも娘もヘトヘトで、正直、調査どころではなく、親の都合で娘をあちこちに連れまわす罪悪感はいつもつきまとう。また生産者に話を聞くころにも、違う環境で不安になった娘が「抱っこ、抱っこ」とせがみ、一苦労だ。夏休みなどを利用して夫が調査と育児を助けにきてくれるが、いつもそうとは限らない。

娘を通じたつながり

つい独り身の自由さを懐かしんでしまいが、逆に子どもがいることで気づくこともあり、子どもを通じて人間同士のつながりも生まれる。先日、同じ保育所に通う女の子のお誕生日会に招待された。子どものパーティーでは必ず「ビニャータ」よばれる、なかにお菓子の入ったクヌ玉が登場し、子どもたちが棒でたたき割るのだが、これが結構難しく、そう簡単には割れない。くわえて大きな男の子の場合には、天井の上で大人がロープを操作して「ビニャータ」を持ち上げたりと割れにくいように意地悪をする。そしてついに「ビニャータ」が割れると、地面いっぱいに散らばったお菓子を集めようと子どもたちが群がる。その光景はなかなかすざ



調査のために訪れた村で、水遊びをする村の子どもたちと娘

まじく、しり込みした娘は結局、何のお菓子も取れなかったが、帰り際にはお土産に袋いっぱいのお菓子をもらって大喜び。しかしこのお菓子が曲者で、人工着色料のたつぷりに入った赤や緑のキャンディを舐めていた娘の口は、みるみるうちに吸血鬼の口ようになっていった。

毎日、調査と育児に追われ、せわしなく時間が過ぎていくが、夕方に家の近くの野原を娘と散歩するときは、心がほっとするひとときだ。オアハカ盆地の夕焼けは本当に美しく、空と山が一体となってあかね色に変化する光景を見ながら、次の日のパワーを充電している。